

「ルネッセ」×ナレッジキャピタルがつなぐ 「これまででと、これから」

「ワイガヤ塾」などさまざまなイベントで協力関係を築いてきた「ルネッセ」とナレッジキャピタル。5周年の集大成として、2018年4月に開催された「ナレッジキャピタル大学校」には、「ルネッセ」に関わる多くの人々が参加した(本誌119号)。大きな反響を得たこのトライアルイベントに関わった3人の方々に、これまでの活動や今後の展望をうかがった。

大阪を地域全体で学べる ニューエデュケーションシテイーに

「ナレッジキャピタル総合プロデューサー」野村卓也 Tomura Takuya

ナレッジキャピタルを開業して、今年の4月で6年になります。形になるまでは、構想を話しても、「大阪で知の拠点？」大阪はお笑いとタコ焼きやろ」という反応が大半で



のむら・たくや
1953年、大阪府生まれ。一般社団法人ナレッジキャピタル総合プロデューサー。株式会社スーパーステーション代表。内閣府本府政策参与(科学技術・イノベーション担当)、関西大学客員教授、大阪芸術大学客員教授。創造産業振興のためのプロジェクトを数多く企画。ナレッジキャピタルでは開業前からコンセプト立案などトータル企画を手がける。

したが、都心にオフィスや商業施設とともに知的拠点があるというそれまでなかった形態が、オープン当初から特に海外で注目されました。これまでで公式で80カ国、400機

関程度の視察団を受け入れています。大阪と世界をつなぐというのは当初からの狙いではあったのですが、これほど世界中から注目されるのは予想外でした。これまでさまざまな形で「学び」の場を設けてきました。カフェ

という気楽な場で専門家から話を聞く「超学校」は、受講者と講演者の距離が近い対話のようなプログラムとして好評ですし、革新的な活動を表彰し広く社会に発信する「ナレッジイノベーションアワード」ではナレッジキャピタル参画者の部門のほかに中高生部門を設定し、中高生と企業や大学が双方に直接交流できる場にもなっています。

「ルネッセ」や池永所長との交流のなかで知ったこともたくさんあります。江戸期の人的ネットワークの中心にいた木村兼葭堂もそうでした。兼葭堂の、人的関係をつくったうえでその信頼関係から新しいものを創造していくやり方は、自分の目指すものと重なり感じました。そうした知見が異業種交流塾「ワイガヤ塾」へと発展し、昨年の「ナレッジキャピタル大学校」を企画するうえ

で、大きなヒントになりました。「ナレッジキャピタル大学校」は2日間に限って開催されたトライアルイベントでしたが、アートパフォーマンスや体験型展示などを交えた大規模なものです。中心となる100コマ超の講義では、大学教授、企業家、美術館館長、子育て研究家、料理家、発明家といった多彩な専門家を講師に迎え、ジャンルやスタイルを超えた幅広い知の集合を実現することができました。参加者の方から「こんな学びの場が欲しかった」という反応をもらったのは嬉しかったです

ですね。開業から5年間の取り組みのなかで、学びの重要性をますます実感しています。実際、大学卒業の22歳までに勉強したことだけで、65歳までいけないですよ。どこかで学び直しをしないといけない。そういう場ともなるよう、今後、「ナレッジキャピタル大学校」を定常化していきたいと考えています。実践的な内容で、そこを出口として次につながるような内容を検討中です。そこから大阪が地域全体で学べる、ニューエデュケーションシテイーになればと考えています。

子どもが感激するような 大人の本気を見せたい

「株式会社ズームス代表」保田充彦 Yasuda Atsuhiko

僕がやっている仕事は、一言でいうと「科学技術と社会をつなぐ」ことです。高度な科学技術をわかりやすく伝えることで、一般の人が教育とか政治、経済について話をするように、「科学技術でこんなことがあったよ」と普通に話題にできるような世の中になればと思っています。それには、まず興味をもってもらえることが大事。実際僕自身、小学校入学時に大阪万博を見に行って、記

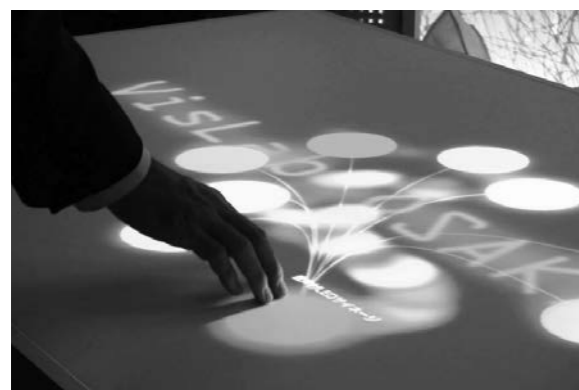
憶としてはおぼろげなのに、感動したことは今も生きています。その体験に引っ張られて現在があると思っています。

ナレッジキャピタルとは、オープン前のトライアルから関わっていて、「ワイガヤ塾」にも参加していますが、「ルネッセ」と聞いた



やすだ・あつひこ
1963年、兵庫県生まれ。株式会社ズームス代表。京都大学大学院航空工学専攻修士課程修了。重工メーカーのエンジニアとしてジェットエンジンなどの開発に携わった後、2006年にズームスを設立。科学技術をわかりやすく伝えるための映像化・可視化事業を続ける。

当初は、「文化」と言われてもわからなくて。というのもこれまで何をすることも「体感する」ことを大事にしている、たとえば英語を勉強するなら文法を覚えるより先に英語の本を読むとか、実際にやってまず感覚を身につけてきました。だから「文化」なんて僕とは対極だと思っただけです(笑)。でも講演で、これまで単なる場所としか考えていなかった大阪が、「その裏に文化があつて今がある」というお話に、クリエイティブイティというのは結局そこにながっていくのだなど。技術とか理論ではない、もっと漠然とした——僕ならば体感、「ルネッセ」ならば文化とか歴史、翻訳というキーワードで語っているけれど、見ている場所とは同じなのだ感じました。「ナレッジキャピタル大学校」では、講義のほかに開発したバーチャルドローンや立体絵本などを実際に見てもらいました。こうしたイベントな



右/「ナレッジキャピタル大学校」での、VR技術を活用したバーチャルドローン体験ブース。
左/ナレッジキャピタルオープン前のトライアルイベントでは、保田氏の開発したタッチウォールがインフォメーションパネルとして活用された。



右/「ナレッジキャピタル大学校」の会場を彩ったイベントのシンボル「宇宙鳳凰[Fecco] Phoecco」。
左/ナレッジキャピタルのサロンには、企業人、研究者、クリエイターなど、分野を超えたさまざまな人が集まる。



どで子どもたちに体験してもらおうことで、ある種の化学反応が起きるととても嬉しい。僕が万博を見てその技術をすごいと感激したのと同じように、子どもの頃の影響は大きいですから、大人が本気を出すところな

ことができるというのを見せてやれば、いいと思うんですね。そうすれば、すごいと感じてくれた子どもたちが、将来もっとすごいものをつくってくれると思っています。

「学び」の場づくりを通して 中高生が本物にふれる機会を

「株式会社スーパーフェスティバルクリエイティブディレクター」 山本粧子 Yamamoto Shoko

「ナレッジキャピタル大学校」で、全体のアートディレクションを担当させていただきました。2日間の大学校を通して、今まで携わってきた仕事のなかで一番「人間の心が動いている」のを目の当たりにした気がします。教室に物理的な壁をつくらないことで、受講者と講師のどちらも「参加者」となり、人間の心の

中の壁も無くなるのだなど感じました。何より、「学びながら盛り上がる」という初めての経験をし、これからこういことが大切になると確信しました。

中高生時代のバレーボール一色の生活から一転して、大学で美学を専攻した当時の私は、視野も偏っていませんし、美術の知識も全くありませんでした。そんな



やまもと・しょうこ

1989年、兵庫県生まれ。株式会社スーパーフェスティバル クリエイティブディレクター。大阪教育大学教育学部教養学科芸術専攻芸術学コース卒業。「人間とはなんだ」をテーマに創作活動を続ける。2019年8月には、兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーにて「山本粧子展 人間とはなんだⅢ」を開催予定。

ときに、大学の先生から「あなたはどこに、かく本物を見てきなさい」と言われ、お金を貯めては海外に行って本物の絵を見ろという学生生活を送りました。さらに卒業後は旅人ではな

く生活してみようと、フランスとドイツの国境付近にあるストラスブルで2年間暮らしました。そこでのさまざまな経験を経て、自分があるりにも日本の社会を知らないことを実感しました。それまで日本よりも海外に目を向けて

「もっと日本を知りたい」という思いが生まれ、帰国してこの仕事に就きました。今はむしろ日本の未来をつくっていききたいという気持ちがあります。

池永所長から「ルネッセ」という言葉を聞いたとき、その語源の「ルネッサンス」に美術の文脈で使う言葉というイメージがあったので、それが社会の文脈で発信されることに衝撃を受けました。池永所長をはじめ、ナレッジキャピタルでそうしたワクワクするような方々と出会えたことを財産にしていきたいですね。もし、中高生時代にそうした出会いがあれば、人生を変える瞬間になると思います。自分自身海外で本物の絵にふれたことで得た感覚が大きいので、これからは中高生が最初から



右/山本氏の作品『輝老人のマンゴー』。
左/「ナレッジキャピタル大学校」で展示された山本氏企画の「のぞきからくり」。本誌でもおなじみの木村兼葭堂や懐徳堂の紹介を、3Dなどのしかけて解説する。

本物と出合えるような企画、ハッピーでワクワクするようなプログラムを考えていきたいと思っています。